

vol.

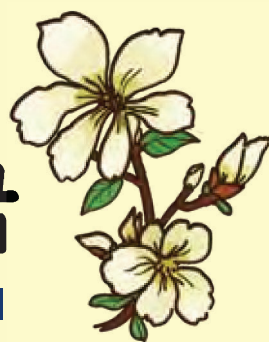
20

Sep.2025

市史編さん広報紙

たちかわ物語

TA CHI KA WA MO NO GA TA RI



写真①

ハレの風景にみる
共有膳椀 いまむかし



*写真①～⑤の説明等については、7ページをご覧ください。

- 今年は、第二次世界大戦が終結してから「80年」が経ちます。その節目の年として、特集1では「戦中・戦後の立川市」にフォーカスします。
- 特集2では、立川市域の「共有膳椀」の現状と、活用されてきたこれまでの風景を振り返り、民俗・地誌部会が実施した民具調査や聞き書き成果の内容とともにお届けします。
- 市史編さん事業に関するイベントでは、「立川の史料を読む会」の関連講座として初開催した『『新編立川市史』の古文書を読む』の様子や、講座の中で取り上げた古文書についても解説しています。

目次

特集1

「戦後80年」回顧企画 軍都から商都へ…立川の人々の戦中・戦後…… 2

特集2

ハレの風景にみる共有膳椀 いまむかし …………… 4

※市史編さん関連イベント開催報告

・その①『『新編立川市史』の古文書を読む』…………… 8

・その② 第8回関連講演会「立川のまちづくりをふりかえる」… 10

・その③ 「写真展 昭和から令和へ…まちの鼓動と変貌」…… 10

※第6期 立川市史編さん委員会委員のご紹介 …………… 11

※令和7年4月～9月における各部会の活動報告 …………… 11

※事務局通信(資料募集・刊行物のご案内 ほか) …………… 12



軍都から商都へ...

今(2025年)から80年前の1945年、すなわち昭和20年は第二次世界大戦が終結した年です。

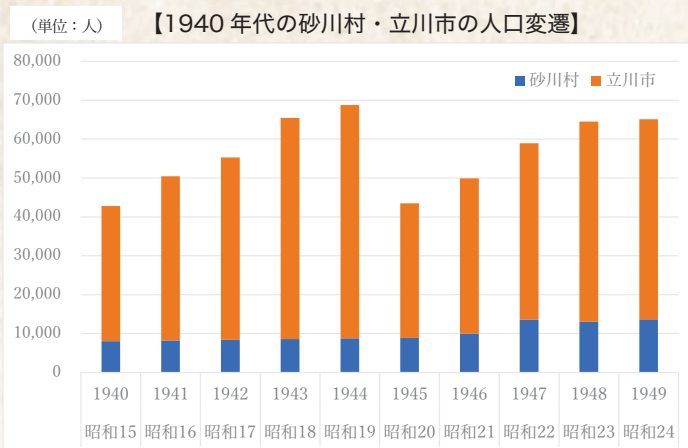
ここでは、戦中・戦後における立川市の人口の推移をみながら、激動の80年をこのまちがどのように乗り越え変化を遂げてきたのかを振り返ります。

「軍都」立川の産業

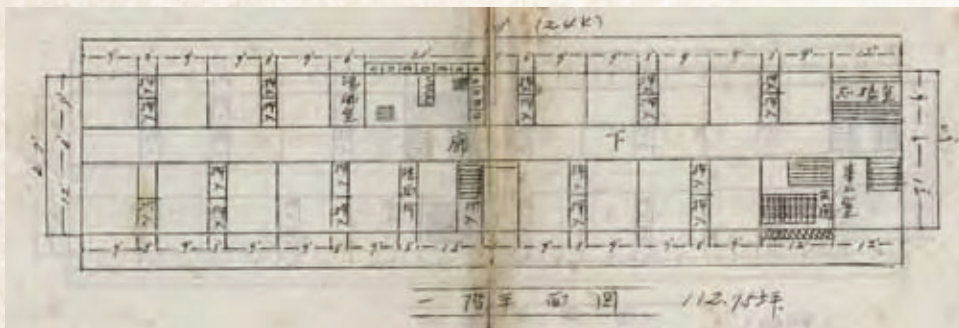
右のグラフは、砂川村・立川市における戦中・戦後の10年間の人口推移です。このうち立川市では、昭和19年(1944)には6万人いた市民が20年には3万4,586人に急減し、人口が最も少ない年になりました。

戦前・戦中の立川市は、日本陸軍の飛行場を擁し、航空産業で栄えた「空都」であり「軍都」でした。19年時点での立川飛行場周辺の状況をみると、西側に陸軍航空工廠※・陸軍航空廠立川支廠・陸軍航空技術研究所などが、東側に立川飛行機砂川工場・立川飛行機立川工場・陸軍航空技術学校などがありました。立川飛行機などの軍需工場では、日中全面戦争やアジア・太平洋戦争開戦に伴い、飛行機の増産が進められていました(写真1)。

※工廠：軍隊直属の軍需工場。



▲『砂川の歴史』(昭和38年)、『立川市議会史 資料編二』(平成3年)より作成。

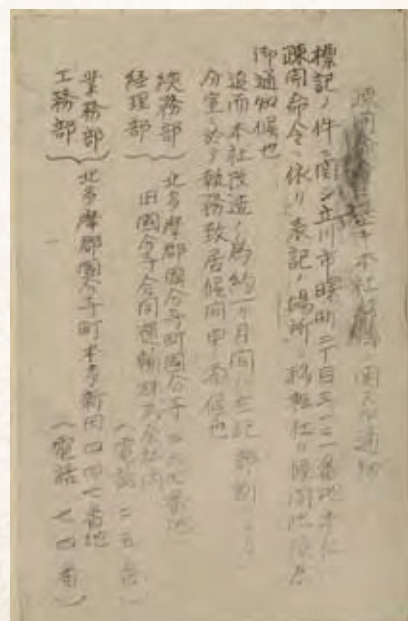


◀ 写真1 昭和19年、立川市軍需労務要員共同宿舍平面図。工業従業員などの増加は住宅不足をまねき、その対策の一つとして軍需労務要員共同宿舍が建設されました。ひと部屋の広さは4畳半で押入が付いていました。

戦争末期の立川

立川市は軍事施設・軍需工場などを有していたことから、東京都区部や武蔵野町(現在の武蔵野市)・昭和町(現在の昭島市)・広島市・小倉市(現在の北九州市)などととともに疎開区域に指定され(写真2)、人員疎開により、立川市からは約1万人が転出しました。また、防空法に基づいて建物疎開も進められました。

昭和20年(1945)2月には、陸軍航空本部で立川飛行機株式会社の飛行機・発動機・機械・動力工具・材料等を分散疎開させる計画が立てられました。飛行機のうち飛行可能なものは高萩飛行場(埼玉県日高市)などへ空輸し、飛行できないものは誘導路を設置して飛行場外に搬出のうえ整備続行とし、発動機・機械・動力工具・材料などは都立二中(現都立立川高等学校)、山水中学校(現桐朋高等学校、国立市)、府中刑務所(府中市)、霞ヶ関(川越市)、河辺(青梅市)などに疎開させるというものでした。戦争終結の8月15日以降、飛行機工場・軍作業場は機能を停止し、立川市内を走っていたおびたしい日本軍の乗用車・軍用トラックは一台も見られなくなりました。



▲ 写真2 昭和19年、疎開命令に基づく北多摩運送株式会社の立川から国分寺への移転通知(葉書)。

立川の人々の戦中・戦後

占領、そして「基地のまち」へ

昭和20年9月3日、立川へ進駐した米軍は、飛行場や隣接する工場を接収し、同5日には立川基地を設置しました(写真3)。関連工場も軍需品の生産を禁止され、立川に残っていた工場労働者は職場を失い、故郷へ帰る者が続出しました。

このように工業は縮小しましたが、基地からの流出物資は立川駅周辺のヤミ市をにぎわせ、基地に勤務する米軍の将兵は、ゲート周辺(曙町・高松町・富士見町)で商店街の重要な顧客となりました(写真4)。このほか、配管や電気工事など、一部の専門技能を持った人々が、米軍基地の整備のために日本政府を介して雇われることもありました。こうした基地経済を背景に、戦後の立川では商業を中心とした復興が始まりました。

「基地のまち」から「商都」へ

戦争が終わったことで、疎開や動員で立川を離れていた人々も徐々に戻ってきました。立川基地が極東地区随一の輸送基地になると、修理工・料理人・ハウスメイド・運転手など、基地内外で多くの雇用が生まれ、人を集めるようになりました。

昭和25年(1950)の統計では、「軍都」であった昭和19年に記録した6万人をついに上回り、最大人口を更新しました。昭和30年代に入ると、将兵の減少や雇用の縮小により、徐々に基地の経済的な影響は小さくなっていきます。一方で、デパートが次々と開業するなど、立川の商業的な発展はますます進みました。

基地の返還から現在へ

米軍立川基地は昭和52年(1977)に、全面返還されました。その跡地は広域防災基地の建設から始まり、国営昭和記念公園の完成を経て、現在では業務ビルや商業施設が並び、日々のにぎわいを生み出しています。

80年前の激動は、現在に続く大きな転換点となったのです。(事務局)



▲ 写真3 接収で米軍基地となった立川飛行場関連施設。



▲ 写真4 昭和27年頃、米軍立川基地のメインゲートが面していた曙町二丁目交差点。米兵向けの看板が並び。

写真の説明・出典と参考文献

写真1、2、4：立川市歴史民俗資料館蔵(写真1、2は旧立川市役所文書)
 写真3：国土地理院提供の昭和22年撮影空中写真を加工
 『新編立川市史 資料編 近代2』(2021年)P.523～527、530～548、550～552、554、573
 『新編立川市史 資料編 地図・絵図』(2019年)P.98～99、122～123
 『たちかわ物語』Vol.8-P.10、Vol.10-P.6～7、Vol.15-P.4～5
 『武蔵村山の戦跡』武蔵村山市教育委員会(2025年)P.5～6
 『新編立川市史 資料編 現代1』(2020年)P.49～51、90～91、184～203
 『新編立川市史 資料編 写真集』(2024年)
 立川市議会史編さん委員会編『立川市議会史 記述編』立川市議会(1992年)
 中野隆右編『立川—昭和二十年から三十年代—』ガイア出版(2007年)
 立川飛行場に関する学習会編『昭和記念公園は飛行場だった』立川市中央公民館(1995年)

かつて日本の村々で広くみられた「共有膳枕」の習俗。どのように生まれ、また立川の地域ではどのように営まれていたのでしょうか。

「共有膳枕」とは？

冠婚葬祭や講などの行事には「人寄せ」、つまり宴会がつきものです。かつての農村社会では、宴会は自宅で行われました。村の人たちが集まって、酒を酌み交わし、ごちそうを共に食しました。農事の合間の楽しみであり、仲間とのつながり確かめる大切な場でもあったのです。

こうした宴会の料理は、一人前ずつ膳に飯、汁、菜、香の物をのせて出す本膳料理(日本料理の正式な形)で供されるため、主に漆塗りの膳枕が使われます。しかし漆器は高価で、個人で揃えるのはとても大変なことでした。そこで、組や講、親族、親しい者同士などが仲間となり、数十人分の膳や枕を共有する習俗が生まれました。民俗学ではこれを「共有膳枕」と呼んでいます。

昭和30年代以降、各地に式場や飲食店ができてくると、人寄せの場は外部の施設へと移り、共有膳枕やその収納倉庫である膳枕倉もほとんど見られなくなりました。

【羽村市での民俗調査による膳枕類の名称と使い方】

図1
うどんの場合(婚礼)

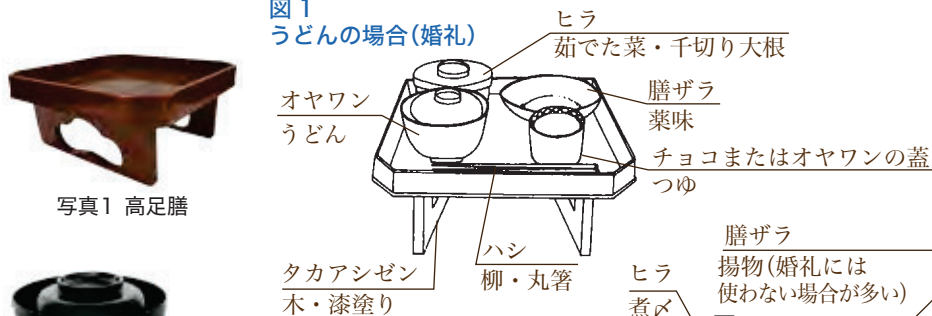


図2
飯の場合(主に仏事)



写真1 高足膳

写真2 親枕

写真3 平枕

写真4 壺枕

写真5 吸物枕

写真7 角樽

写真8 銚子(上)、三蓋盃(下)

写真9 布袋(上)、木箱(下)

写真6 陶磁器皿

写真11 湯桶

写真10 切溜

「共有膳枕」の主な種類

膳

一人用の食事をのせる台。日常には食器を収納できる箱膳、ハレの日には漆塗りの会席膳や高足膳(写真1)が使われることが多かったようです。

枕

食物を盛る漆塗りの木枕。多摩地域では、一つの膳に親枕(飯枕)(写真2)、汁枕、平枕(写真3)、壺枕(写真4)を並べるのが基本でした。料理や宴の内容に応じて、吸物枕(写真5)、陶磁器皿(写真6)なども使われます。

酒器

宴会には酒がつきものです。角樽(写真7)は、結納や婚礼の際に、酒の贈答や宴席の飾りとして使われます。三々九度には銚子と三蓋盃(写真8)が使われました。

収納具

膳枕を収納していた布袋や木箱(写真9)には、所有者名や品名、購入年などが書かれていることがあり、研究の重要な手がかりになります。

その他

立川では、ハレの日によくうどんを食べました。共有膳枕の中にうどんなどを入れる切溜(写真10)や汁を注ぐ湯桶(写真11)がみられることも、この地域の特徴といえます。

南関東の共有膳碗

共有膳碗は近世後期頃から各地で確認され、明治期には広がりを見せていました。その成り立ちには、江戸や京阪の料理文化の地方への伝播、漆器の生産量・流通量の増加、農村社会の生活の安定や経済力向上など、さまざまな背景が絡み合っていたと考えられます。

都市の華やかな料理文化が流入し、有力者から膳碗を借りたり共有の膳碗を持ったりすることで、地方の農民たちも格式ばった儀礼や食膳を自分のものとするできるようになったのです。その過程には、農民たちの自治意識や平等意識の醸成もうかがえます。また、近世から明治時代にかけての共有膳碗の所在分布が、台地や丘陵地、山地などの畑作村に顕著であり、沖積平野の水田地帯にはほとんどみられないことから、前者に早くから膳碗の共有を成立させる社会的な基盤があったとする指摘もあります。

畑作村の場合、近世中期からの商品作物の普及によって経済力が向上し、各家の経済力の平準化がおきやすく、膳碗類の購入が行いやすかったのではないかとされています。

共有膳碗は全国にみられますが、共有する主体には以下のように地域性がうかがえます。

- 東京都多摩地域から神奈川県相模川東岸
→地縁的な相互扶助組織である「講中」が主体となっているのが一般的。
- 福島県・栃木県・山梨県など
→村や組などの地縁集団が主体。
- 広島県→浄土真宗の講が主体。
- 静岡県→こうしんこう庚申講で共有する例が多い。これに対して、膳碗は共有せず個人で揃える例も全国的にあった。
- 富山県→たのもしこう輪島塗の商人などからののはたらきかけでとや おおがみこうじゅう碗頼母子講(9ページに注釈あり)がつけられ、お金を融通し合うことによって家ごとに膳碗を揃えた例が多く報告されている。

成立年代や運営方法

東京・神奈川・埼玉を中心に行われた調査によると、寛政5年(1793)の埼玉県入間市坊の例がもっとも古く、次に文化2年(1805)の神奈川県相模原市(旧津久井町)鳥屋・大上講中が古いようです。大上講中の場合、文化2年銘を持つ飯櫃めしびつが神奈川県立歴史博物館に所蔵されています。文政期(1818～1830年)以降は次第に事例が増えていきます。

運営の方法も多様です。東京都福生市・内出稲荷講の共有膳碗の場合、成立は江戸時代にさかのぼると考えられています。ここでは講員への金銭の貸付も行われていました。

米が収穫できてもお金に困る家が多く、豊かな家と貧しい家の差が出ないようにお金を融通し合う、互助の精神から貸付制度が始まったとされています。

神奈川県相模原市・たいまいちば当麻市場講中では、「わりほう割法」といって各家が経済状況に応じて4段階に分けられ、膳碗購入のための拠出金額を割り当てられていました。これと似た「応分負担」の例は東京都八王子市でも報告されています。

どの地域でも膳碗は共有財産として、お金と同様に大切にされていたことがわかります。相模原市などの拠出金応分負担の例からは、内出稲荷講で語られた「豊かな家も貧しい家も差が出ないように」「互助の精神」が、よりはっきりとうかがえます。

成員個々のさまざまな差異を内包しつつ助け合う精神が、このような民俗の生まれる背景にあったのではないかと考えられます。

(民俗・地誌部会編集委員 神 かほり)

立川市内の共有膳碗

立川市には、「組」と称する集落や講中、集落内の家々が協力し合う膳碗の組合がありました。民俗・地誌部会の調査では、柴崎地区と砂川地区のあわせて13カ所で膳碗の所在を確認できました。

膳碗の利用年代を近隣の例と比べてみましょう(6ページのグラフ1参照)。南関東では、文化14年(1817)以降、毎年のように各地で共有膳碗を設ける例があり、その傾向は明治10年(1877)と昭和5年(1930)の2つの時期に画期を迎えます。

市内でも同様の時期に2つの画期があり、傾向は似ています。共有膳碗が認められるのは柴崎地区で早く(写真12：弘化2年[1845])、砂川地区は明治時代に入ってからです(明治7年[1874])。以後、砂川地区の例が続ぎ、明治末から昭和のはじめにかけて柴崎地区の例が登場します。この背景には、養蚕業の隆盛、甲武鉄道や立川飛行場の開設等がかかわっていると思われます。

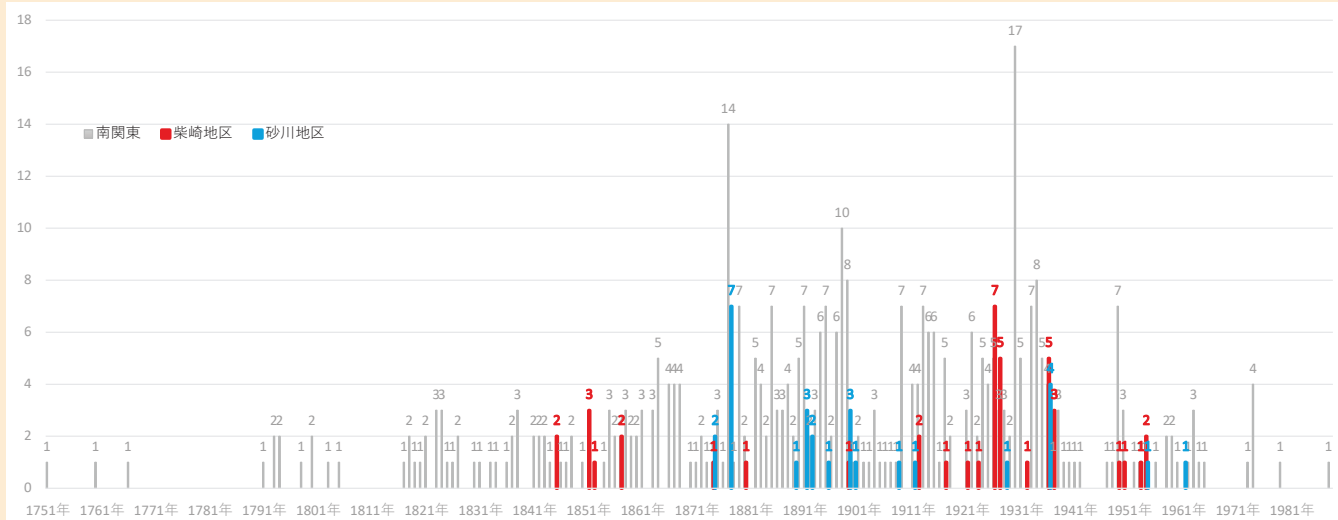
共有膳碗を設ける例は以後減っていきます。6ページの表1には、膳碗の共有主体を一覧にし、最も古い記録(紀年銘)と、最も新しい記録(膳碗組合が解散した年、もしくは、所有していた膳碗を寄贈した年)を示しました。100年を超えて存続してきた共有膳碗の習俗は、高度経済成長期を挟んで消滅段階にあるといえます。

所有形態をみると、柴崎村名主なぬしが著した「公私

共有膳碗 いまむかし

本特集では、市民の方々の協力やこれまでの調査・研究から得られた立川市域の「共有膳碗」について解説します。

グラフ1【立川市内の共有膳椀紀年銘の年次分布】



- (1) 紀年銘は、膳椀購入(寄贈)時に収納具へ記された墨書等をさす。
- (2) 南関東の事例は、『南関東の共有膳椀』所載データベース「紀年銘のある膳椀類」(397件)をもとに、立川市内の山中講中(12件)のデータを除いて作成。
- (3) 立川市の事例数：柴崎地区42件、砂川地区29件、総数71件。

表1【立川市内の共有膳椀所有主体・紀年銘・寄贈年・解散年】

町名	所有の主体	紀年銘	寄贈年・解散年*	所蔵
富士見町	山中講中	弘化2年(1845)	平成14年(2002)	立川市歴史民俗資料館
柴崎町	番場組	—	—	立川市歴史民俗資料館
	出口組	安政4年(1857)	平成16年(2004)	立川市歴史民俗資料館
錦町	下和田組	嘉永5年(1852)	平成11年(1999)	立川市歴史民俗資料館
幸町	八番組／東組	明治28年(1895)	昭和56年(1981) 平成5年(1993)**	立川市歴史民俗資料館
柏町	六番組／東地区	明治24年(1891)	平成14年(2002)	立川市歴史民俗資料館
	七番組	—	平成28年(2016)	立川市歴史民俗資料館
砂川町	三番組／上組	明治7年(1874)	令和2年(2020)頃	個人
	五番組／中講中	明治10年(1877)	平成7年(1995)	立川市歴史民俗資料館
上砂町	二番組／上組	明治22年(1889)	平成18年(2006)	立川市歴史民俗資料館
	二番組／中組	—	昭和60年(1985)	立川市歴史民俗資料館
	二番組／下組	明治41年(1908)	平成19年(2007)	個人
西砂町	殿ヶ谷組	明治44年(1911)	平成12年(2000)	殿ヶ谷公会堂(一部)

*立川市歴史民俗資料館所蔵例は寄贈年、左記以外の所蔵例は解散年。
**八番組の上段は解散年、下段は寄贈年。

日記」からは、名主家が自家用に購入した膳椀の一部を組へ寄贈し共用されていたことがわかります。有力者のみならず個々の家々がさまざまに支え合うことで成り立ってきた様子がうかがえます。

ハレの風景にみる共有膳椀

表紙をご覧ください。中央の大きな写真は八番組(幸町)の東の膳椀組合が解散する際、「結婚式」を模した会食の様子です(表紙写真①、昭和56年[1981])。矢印の順に準備をし、上座には水引をかけた盃、銚子、角樽が飾られ、まず、脚付き膳に配膳された酒肴(陶磁器に盛り付けられた煮物、きんぴらゴボウ、酢の物、刺身)を、次いで親椀にご飯・うどんを盛って食したようです。

この会食からは、二つの点を指摘できます。一つ目は、

共有膳椀が社会的な承認を支え、格式をもってハレの場を彩るものであったことです。普段の一汁一菜ではなく、膳の形式でご馳走(うどん)をいただく点に特色があります。婚礼では酒器を用いてお酒を飲み、新たな夫婦が認められるわけですが、この儀式は組合員みんなの眼差しを集めた、格式あるものでもあったのです。それは、共有膳椀の目録に「家内喜多留」※と称した角樽が筆頭に挙げられていたことにもうかがうことができます(表紙写真⑤)。二つ目は、この会食自体が趣き深い、膳椀組合の解散方法であったことです。たとえば、西砂町の殿ヶ谷組は、平成12年(2000)に解散し、膳椀を組合員へ分配しました。しかし、「婚礼用の銚子」「家内喜多留(角樽)」、湯桶などは分けずに殿ヶ谷公会堂内の飾り棚に解説を付して展示しています(写真14)。

膳碗は「高価な食器」という意味だけにとどまらず、組合員が共に過ごしてきた記憶や気持ちを象徴するものでもありました。というのも、組合員間の交流は、結婚式、葬式のみならず、出産、宮詣りなどにも及んでいたからです。市内では、地親類^{じしんるい}という言葉が聞きました。親族にもひけを取らない社会的な意義があったのでしょう。

八番組の例では、昭和26年(1951)当時、膳碗を使用していた組合員20名に正副の違いに応じた使用料の差が設けられていました。そして、その徴収は当家の両隣家が担うものでした。使用料等に差がある例は、移住者等を段階的に受け入れる仕組みとして、各地に類例があります。両隣家が重要な役割を負っている点は、隣接する武蔵村山市においてもみられず、共有膳碗の地域の特徴として注目されます。行事を当家まかせとせず、組合がこまやかな配慮をしながら支えていたのでしょう。使用料の差はその後解消され、同額になりました。

共有膳碗の習俗からは、近隣の家々が助け合いながら地域社会をつくりあげてきたことがわかります。

※家内喜多留：柳を素材としたことにちなむ酒樽の別名。角樽ともいう。4ページの「酒器」も参照。

未来のハレの風景に向けて

以上のとおり、市内における共有膳碗の習俗の成り立ちと特徴の一端をご紹介しました。

立川市内の共有膳碗については、不明点(入手先、膳碗倉、帳簿等)も少なくありません。民俗・地誌部会では、引き続き、その成り立ちや特徴の解明に寄与してまいります。

民俗や文化史の解明を通じて、市民の方々にとってのハレの場がより良い風景になることに寄与したいと思っております。

(民俗・地誌部会 部会長 中野 泰)

写真・図の説明と出典

【表紙】

写真①：「祝言(結婚式)」を模した会食

写真②：うどんを切る組合の男性たち

写真③：膳碗の準備をする組合の女性たち

写真④：盛り付け・配膳の様子

※写真①～④は、立川市歴史民俗資料館蔵のモノクロネガフィルムをもとにカラー加工を施したため、実際の色調と異なる箇所があります。カラー化には、AI機能を搭載したAdobe Photoshopニューラルフィルターを用いました。

写真⑤：昭和36年(1961)の共有膳碗目録。二番組の下組(上砂町)

【4～7ページ】

※図1、2：米川幸子 1987「幕末・明治期の食器―農村を中心に―」『多摩のあゆみ』49号の図2、3をもとに一部改変。

写真1～12：立川市歴史民俗資料館蔵

写真13：石塚和生氏による提供

その他の写真：民俗・地誌部会の撮影による。



◀ 写真13
殿ヶ谷組膳碗倉収蔵
物仕分分配の際の記念写真。



◀ 写真14
殿ヶ谷公会堂で展示
されている共有膳碗(一部加工)。

参考文献

石川悦子 2012「村のくらし―膳碗組合をとおして―」『資料館だより』54 武蔵村山市立歴史民俗資料館

小川直之 2002「ハレの食器と共有膳碗」 印南敏秀ほか編『もの・モノ・物の世界―新たな日本文化論』 雄山閣

関東民具研究会編 1999『南関東の共有膳碗―ハレの食器をどうしていたか―』

相模原市教育委員会 1988『当麻：相模原市村落景観調査報告』

相模原市教育委員会 1994『古山の組織と運営(相模原市民俗調査報告書)』

神かほり 2001「共有膳碗の成立をめぐる」『民具研究』123号

竹内由紀子 2010「共有膳碗の全国的拡がり」 田中宣一先生古稀記念論集編集委員会編『神・人・自然―民俗的世界の相貌―』 慶友社

田中宣一 1989「多摩市内の『講中物』」『ふるさと多摩：多摩市史年報』2号

増田昭子 1989「多摩市内の『講中物』について」『多摩市の民俗社会生活(多摩市史叢書：1)』

増田昭子 1993「内出の膳碗倉」『福生の民俗 民具Ⅱ 膳碗倉の用具(福生市文化財総合調査報告書：26)』

市史編さん関連イベント 開催報告

開催報告その①

「『新編立川市史』の古文書を読む」

令和7年(2025)4月18日(金)、市史編さん関連講座「『新編立川市史』の古文書を読む」をたましん RISURU ホール(第1会議室)にて初開催し、市内外から40名超の方にご参加いただきました。その内容をレポートします。

柴崎村の様子を伝える鈴木家文書

本講座では、古文書にはじめてふれる方でもわかりやすく、また、立川の歴史に興味を持っていただけるよう、『新編立川市史 資料編 近世1』に掲載した鈴木家文書(立川市歴史民俗資料館蔵)の中から、江戸時代の村の有り様がわかる4点の古文書を取り上げ、くずし字の読み方や内容について解説しました。

市史編さん室では令和7年の2月から4月にかけて、本事業に関連する講座、講演会、写真展を開催しました。その様子についてご紹介します。



▲講師の解説に熱心にメモを取る皆さん。
質問なども多く聞かれました。

市史編さん事業では、「立川の史料を読む会」として平成28年度から市民との協働による古文書の解説を行っています。その成果は市史の刊行物にも反映されています。

今回の講座は、本事業や「立川の史料を読む会」を多くの方に知っていただきたく実施しました。古文書の解説、そして市民協働の貴重な場として、今後も会の活動を続けてまいります。

史料① 天明7年(1787) 名主交代に伴う引き継ぎの御用書物の受け取り状



柴崎村の名主・小川弥惣治が、前任の鈴木平九郎から公用書類を引き継いだ際の受け取り状です。水帳(検地帳)※1や裁許絵図※2、鷹場の鑑札、用水管理に関する文書など、当時、村が保管していた書類について具体的に書かれています。

※1 水帳(検地帳)：領主が年貢の徴収のために作成した土地台帳。土地の種類や面積、権利者などを記載している。

※2 裁許絵図：土地や水などの領有権をめぐる裁判の結果として、領主の判決を絵と文章で示した文書。

史料② 明和8年(1771) 柴崎村村鑑帳

現在の市勢要覧にあたる村明細帳(村鑑)です。柴崎村の生活や産業、村の負担(金銭や労働)について以下のように書かれています。

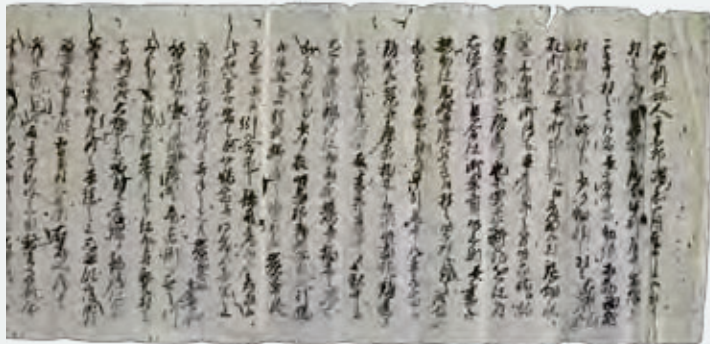
- 世帯数246軒、人口1,056人、馬58頭を所有
- 甲州街道日野宿の助郷※3を務める
- 武蔵野の土地は豊かでなく、特別な作物はない
- 農業以外に草刈りや縄ない※4、木綿の機織り、駄賃稼ぎ(馬を用いた運送業)をなりわいとしている
- 多摩川で鮎漁をし、江戸城へ納めている
- 多摩川の堤防は、幕府の公費で維持されている(御普請所) など

※3 助郷：公用のため街道を通行する人馬の交代要員を街道周辺の村で負担すること。

※4 縄ない：わらなどをより合わせて縄をつくる作業。



史料③ 享和4年(1804) 馬持ち百姓難儀のため炭の新規川下げ取り止め願い



柴崎村ほか16カ村が領主に提出した要望書です。主な内容は以下のとおりです。

- 自分たちは甲州街道の宿場(日野宿)と、日野宿や府中宿へ助郷を務める村である
- 武蔵野の村なので畑作主体である。駄賃稼ぎの現金収入で肥料を購入して生活している
- 甲州街道を運ばれていた炭などが多摩川で川下げ※5されるようになり、生活が脅かされているため、川下げを差し止めてほしい

川下げが街道沿いの地域、ひいては幕府にも不利益となると主張しています。助郷という負担を逆手に取って、「馬稼ぎが廃れると助郷にも悪影響が出る」という理屈で、自分たちの生活や産業の保護を求めました。

※5 川下げ：筏^{いかだ}などを使って材木などを川の下流に運送すること。

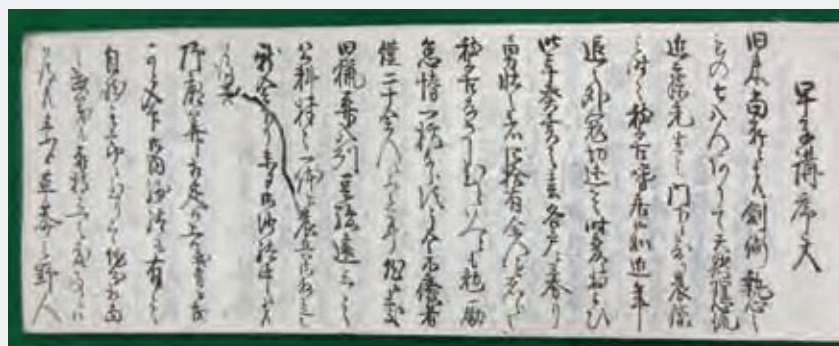
史料④ 文久4年(1864) 甲子講序文

「甲子講」という頼母子講※6に関する文書ですが、その目的は武具や防具を購入する費用の確保にありました。もともと柴崎村には近藤勇に剣術を習う者が数名いたが、戦争への危機感から多数の村民を稽古させるようになったこと、さらに昨年の農兵制※7の実施を受けて武器の調達を試みていることなどが書かれています。

文久2年(1862)の生麦事件以降の緊迫した社会情勢は、多摩地域にも影響を及ぼしました。とりわけ柴崎村のように街道沿いで人の往来が盛んなところは、情勢の変化や治安悪化の影響も受けやすく、世情に敏感でした。

※6 頼母子講：参加者が資金を積み立て、抽選によって互いに金銭を融通する組織。

※7 農兵制：治安維持や軍事力強化のため、主に幕府や藩が農民を軍隊に組織する制度。



8～9ページにご紹介した史料①～④は、内容や時代は異なるものの、武蔵野や多摩川、甲州街道といった地勢が柴崎村のしくみや暮らしにさまざまな面で影響していたことをうかがい知ることができます。(事務局)

*史料①～④は、『新編立川市史 資料編 近世1』に解読文を掲載しています(史料1-3、19、99、160)。

※柴崎村や鈴木家文書については、『たちかわ物語』11号の特集(P4-7)もあわせてご覧ください。

本講座に参加された方々の声

初心者でも関心のもてる古文書ばかりであった。

資料を残すこと、資料を読み込む地道な作業の大切さを感じた。

映像等視覚的な資料も提供してもらえると更に興味を持てた。

古文書内の「用語集」があれば良かった。

立川市の古文書に関する講座にこれからも参加したい。

柴崎村の歴史の一端を知ることができて面白かった。

村の事情について分かった。

「立川の史料を読む会」で一緒に活動しませんか！

「立川の史料を読む会」では、江戸時代の立川に関する未解読の古文書を参加者同士協力して読み進めています。読むのが難しい古文書もありますが、新しい事実がわかる驚きや発見も味わえる会です。解読の成果は、今後の刊行物に活用させていただくだけでなく、地域の歴史を明らかにする資料として将来に残していきます。

興味や関心がある方は、12ページの立川市文化スポーツ部 市史編さん室までお問い合わせください。

開催報告その②

第8回関連講演会「立川のまちづくりをふりかえる」

基調講演 沖川 伸夫氏(現代部会 部会長)
「立川のまちづくりへのアプローチ」

立川でのまちづくりの分析において、行政、官民協働、民間など、さまざまな視点からとらえる必要性が述べられました。

第1部 松本 洋幸氏(現代部会 編集委員)
「大立川の建設から業務核都市へ
一多摩の中心都市を目指して1955～1995年一」

国や都が首都圏整備を進める中で、立川市がどのようにまちづくりを進めたのか、広域的な視野での講話が印象的でした。

第2部 金子 淳氏(現代部会 副部会長)
「立川市の団地開発と地域社会」

市内で大規模団地の開発が進められた経緯と、それによって地域社会がどのように変化していったのかがわかる興味深い内容でした。

開催報告その③

令和6年度市史編さん関連展示 「写真展 昭和から令和へ…まちの鼓動と変貌」

■ 令和7年(2025)2月22日(土)～28日(金)
立川市役所 1階 多目的プラザ

■ 3月1日(土)～14日(金)(9日を除く)
※たましん RISURU ホール 3階ギャラリー

立川市史のことをより多くの方に知っていただくために、また本年は昭和の年号で数えると「100年目」にあたることから、立川市域で昭和期に撮影された写真を中心に、現在の同地点で撮った写真や撮影地点を示す地図・解説を展示し、時の流れとともに変化してきた立川の街並みや風景を紹介しました。

展示した写真は、令和6年(2024)3月刊行の『新編立川市史 資料編 写真集』から厳選したものに加え、掲載しきれなかったものや刊行後新たに調査・複写した写真です。

各会場には、市内だけでなく市外からも多数来場いただき、昔を懐かしむ声やはじめて知る立川の姿に対する驚きなど、さまざまな感想をお聞きすることができました。

令和7年(2025)3月2日(日)、たましん RISURU ホール(小ホール)において、左記のとおり市史関連講演会を開催しました。市内外からは70名を超えるさまざまな世代の方が来場され、盛況な会となりました。



◀ 映し出される資料を熱心に見つめる来場者の方々。

ご登壇いただいた方々



沖川 伸夫氏



松本 洋幸氏



金子 淳氏

令和6年度市史編さん関連展示を以下のとおり実施し、お子さん連れの方や高齢者など、連日たくさんの方が立ち寄ってくださいました。

解説も付けた展示パネル。▶



▲ 各会場には計82点の写真資料を展示。

▼ 多くの年代の方々が立ち寄られていました。





第6期 立川市史編さん委員会委員のご紹介

立川市史編さん委員会は、市長の諮問機関として設置され、市史編さんに関する基本的な事項について審議を行う会です。このたび、第6期 立川市史編さん委員会委員が以下のとおり決定しました。任期は令和7年9月1日から2年間です。

職 名	氏 名	所 属 等
委 員	大 友 一 雄	国文学研究資料館名誉教授
委 員	小 林 尚 子	公募による市民
委 員	白 井 哲 哉	筑波大学図書館情報メディア系教授
委 員	杉 浦 早 苗	公募による市民
委 員	鈴 木 功	元立川市文化財保護審議会会長
委 員	豊 泉 喜 一	前立川市文化財保護審議会会長
委 員	桧 崎 茂 彌	多摩戦時下資料研究会・元高等学校教諭
委 員	保 坂 一 房	たましん地域文化財団歴史資料室
委 員	和 田 哲	立川市文化財保護審議会委員

(敬称略・50音順)

令和7年4月～9月における各部会の活動報告



月	日	活動内容
継続調査		近世部会・近代部会：砂川町個人宅調査
		近代部会：立川市歴史民俗資料館調査
		民俗・地誌部会：砂川町個人宅調査、立川市歴史民俗資料館所蔵膳枕調査
4月	15日	事務局：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館調査
	18日	事務局：市史編さん関連講座「『新編立川市史』の古文書を読む」
	19日	民俗・地誌部会：第1回柴崎地区巡検
	27日	民俗・地誌部会：第2回柴崎地区巡検
	29日	民俗・地誌部会：立川市歴史民俗資料館所蔵共有膳枕の補足調査準備
5月	10日	民俗・地誌部会：立川市歴史民俗資料館所蔵共有膳枕の補足調査
	16日	事務局：市民協働作業『立川の史料を読む会』
	17日	民俗・地誌部会：第2回砂川地区巡検
	24・25日	事務局：歴史学研究会大会出展(刊行物の頒布)

月	日	活動内容
6月	1日	近代部会：第1回部会会議 近世部会：第1回部会会議
	12日	現代部会：第1回部会会議
	15日	事務局：多摩地域史研究会参加(於たましん RISURU ホール)
	16日	民俗・地誌部会：砂川町個人宅調査
	19日	現代部会：特定部会会議
	20日	事務局：市民協働作業『立川の史料を読む会』
7月	6日	民俗・地誌部会：第1回部会会議
	15日	民俗・地誌部会：立川市歴史民俗資料館所蔵共有膳枕の補足調査
	18日	事務局：市民協働作業『立川の史料を読む会』
	28日	古代中世部会：無量光寺(相模原市)石造物調査
	31日	第25回立川市史編集委員会会議
8月	5日	第20回立川市史編さん委員会会議(書面開催)
	15日	事務局：市民協働作業『立川の史料を読む会』
	20日	現代部会：特定部会会議
	22・23日	民俗・地誌部会：諏訪神社例大祭調査
9月	19日	事務局：市民協働作業『立川の史料を読む会』
	20日	近世部会：第2回部会会議

市史編さん広報紙



市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています

令和7年(2025)9月19日発行

発行元 立川市

〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9

編集 文化スポーツ部 市史編さん室

〒190-0022 東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル201

TEL (042)506-0021/FAX (042)525-1601

E-mail chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp

URL <https://www.city.tachikawa.lg.jp/kanko/bunka/1003076/index.html>

印刷 有限会社 広伸印刷

市史編さん事業に関するHPはこちらからもアクセスできます



地域包括支援センターでも大好評♪
『たちかわ物語』が活用されています

南部東はごろも地域包括支援センターでは、昭和30年代(1955～)の市内の写真や映像などを題材に昔を懐かしむ「オールディズ物語カフェ in 羽衣」が定期開催されています。5月19日の回では、『たちかわ物語』14号(令和4年9月20日刊)に参加された皆さんでご覧になり、昔の立川の思い出話に花が咲きました。その様子は同センターの情報紙『まちなねっと』(左写真)に掲載されています。これからも多くの方々にさまざまな形で活用いただける情報をご紹介します。

古い資料や情報のご提供及び 市史関連講座へのご参加をお待ちしています

市史編さん室では、立川市の歴史や民俗をひも解く手がかりとなる古い資料や情報を探しています。ご自宅や自治会、企業や団体などで思いあたるものやお聞かせいただける情報などがありましたら、以下までご連絡をお願いします。

写真(紙焼き、フィルムなど)、絵はがきや地図、
古文書、記念誌や会報誌、チラシやポスターなど

また、市民協働による「立川の史料を読む会」の活動に参加いただける方もご連絡をお待ちしています。

【お問い合わせ先】

立川市文化スポーツ部 市史編さん室

TEL : (042) 506 - 0021

FAX : (042) 525 - 1601

E-Mail : chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp

古い資料に再び命を吹き込んでいます

寄贈いただいた古文書などにはホコリや虫のフンなどが付着していることがあるため、調査員さんが汚れを取り除く作業を行っています。それを丁寧に行うことで古い資料が生き返り、市史編さんの貴重な財産として長く残すことができます。気苦勞の多い作業ですが、「なかなか目に見えない古文書に直接ふれられるので、とても貴重な経験です」と話す調査員さん。さまざまな方々に支えられながら市史編さんを日々進めています。



▲ やわらかなハケを用いて、資料のホコリや汚れを何度も拭拭していきます。

『新編立川市史 資料編』シリーズ 販売中!!



以下の場所で購入できます

■ 立川市役所3階
市政情報コーナー
立川市泉町 1156-9
☎ 042-523-2111 (代表)

■ 立川市歴史民俗資料館
立川市富士見町3-12-34
☎ 042-525-0860

■ オリオン書房ノルテ店
立川市曙町 2-42-1
パークアベニュー 3階
☎ 042-522-1231

■ ジュンク堂書店立川高島屋店
立川市曙町 2-39-3
立川高島屋 S.C. 6階
☎ 042-512-9910

資料編は、旧石器時代や縄文時代などを扱う「先史」から、平安時代や戦国時代などの「古代・中世」、江戸時代の「近世」、明治以降の「近代」「現代」、また暮らしの中の文化を記録した「民俗」、資料形態別の「地図・絵図」と「写真集」があります。

< 資料編 >

先史	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文602ページ・上製本	価格 3,500円
古代・ 中世	B5判・カラー口絵16ページ・ 本文604ページ・上製本	価格 2,500円
近世1	B5判・カラー口絵16ページ・ 本文604ページ・上製本	価格 2,500円
近世2	B5判・上製本(令和7年度刊行予定)	価格 未定
近代1	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文575ページ・上製本	価格 2,500円
近代2	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文580ページ・上製本	価格 2,500円
現代1	B5判・カラー口絵4ページ・ 本文579ページ・上製本	価格 2,500円
現代2	B5判・カラー口絵4ページ・ 本文595ページ・上製本	価格 2,500円
柴崎の 民俗	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文535ページ・上製本	価格 2,500円
砂川の 民俗	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文549ページ・上製本	価格 2,500円
地図・ 絵図	A4判・フルカラー・190ページ・ 上製本・DVD付	価格 3,000円
写真集	A4判・フルカラー・367ページ・上製本	価格 4,000円